

コーカサスの民族問題 エロール・カラエリ

訳注: この論文は、トルコのイスタンブールに本拠を持ち、北コーカサス出身者たちによって創設された「カフカス財団」のウェブサイト、ロシア語版に掲載されたものである。 <http://www.kafkas.org.tr/russian/bgkafkas/etniksorunlar.html#2> しかし、現在、この URL は閉鎖されている。19 世紀後半の数十年にわたるカフカス大戦争の結果、ロシア帝国は、北コーカサスの少なからぬ民族集団を完全に抹殺し、殺害を免れた多くの人びとを隣国トルコのアナトリア半島に追放した。現在でも、北コーカサスに暮らすコーカサス諸民族よりも、実数においては、トルコに暮らす北コーカサス出身者の方が多いと言われていることを知っておくべきかと思う。本文は、第2次チェチェン戦争勃発以前の 1997 年に公表されたものであるが、今日的な意味は、失われていないと考える。(訳者: 岡田一男)

問題の根源

ダゲスタン

チェチニア

イングシェチア

北オセチア

カバルディノ・バルカリア

カラチャイ・チェルケシア

アディゲヤ

アブハジア

南オセチア

問題の解決

はじめに

1991 年末のアルマトイ会議の後、そのくびきに数千万の自由や経済的独立を知らぬ人々を縛りつけていたソビエト社会主義連邦共和国(USSR)は崩壊した。この変化はロシア帝国の全域を震撼させた。ソ連を構成する 15 の共和国は独立を宣言し新国家を形成した。そしてロシア社会主義連邦共和国(RSFSR)に含まれていた 21 の自治共和国・州は、クレムリンの圧力の下、ロシア連邦を形成した。その後、ロシアは他の国々にも圧力を掛けて統合を強いて独立国家共同体 (SNG=CIS)を形成させた。

旧ソ連の諸民族にとって、この過程は非常に病的なものに推移した。急速な変化は全ての地域に不安定な状況を作り出し、それは特にコーカサス地域で顕著に現れた。独立を宣言した外コーカサス諸共和国(グルジア、アゼルバイジャン、アルメニヤ)は、ロシア側からの挑発に対応しきれなかった。

その結果、局地的な民族間戦争が勃発した。その戦争の終結のためロシアの利益に従わざるをえなかった。そしてアルメニア領内に3つの、グルジアには4つの軍事基地が置かれることになった。軍事基地が置かれて脆弱な和平が実現したが、今日まで問題は解決せぬままになっている。これらの事件が起こっているとき、北コーカサスでも事態は先鋭化していた。

問題の根源

自らに問いを發してみよう。北コーカサスのどこに問題があるのだろうか。我々は既に多すぎるほどの回答を聞いてきた。が、一つだけはっきりした点では共通している明らかなことがある。コーカサスと戦ってきたのは誰だったか？北コーカサスの民族を強制移住させたのは誰だったか？この地に流血を強いたのは誰だったか？死体に敬意を払わなかったのは誰なのか？その答えはロシアに決まっている。

ピョートル大帝の時代からロシアは暖かい海の岸边に出ることを自らの課題にしてきた。その道には歴史的な競争相手、トルコとイランが立ちはだかっていた。しかし、既に18世紀、国際的な軍事的・政治的力を失っていたトルコとイランは、ロシアのコーカサス進出をくい止めることが出来なかった。そして西側の世界中に関心を持つ強国もロシアのコーカサス進出には口を挟まなかった。こうしてロシアがコーカサスを占領した。

コーカサスを占領して130年以上が経つ今、ロシアはコーカサスを自分の庭のように語っている。ロシア大統領ボリス・エリツィンが1995年9月26日に国連総会で語った演説がそれを証明している。ツァーリズム・ロシア、ボリシェビズム・ロシア、そして引き続き現ロシアと、時代は変わっても暖かい海を目指すという戦略的な目標は変わっていない。ロシアが自分の目標に向かって努力を続ける間は、コーカサスの安定は実現しないであろう。というのも、コーカサスは、ロシアにとって南の海に向かう門のようなものだからだ。

コーカサスにおける問題の源泉としては、さらに経済政策、正確に表現すれば、旧ソ連時代の経済政策の亡霊的残骸が上げられる。

コーカサスは豊かな石油の産地であり、豊穡な土地である。それらもまた問題を引き起こす根源となっている。これら天然の恵みの分け前を近隣諸国が望んでいるからだ。それらが解決したとしても、更に控えているのが、民族と民族分布問題である。

グルジア、アルメニア、アゼルバイジャンという、外コーカサス(南コーカサス)諸国については、グルジアのアブハジアと南オセチアを除いて、ひとまず置いておき、北コーカサスの深刻な民族とその分布問題を解説して行こう。北コーカサスには50以上の民族集団(エスニック・グループ)が暮らしている。彼らは、9つの共和国と自治州に分けられている。共産主義の時代、特にスターリン時代に極めて反民族的な政策が挑発的に繰り返された。例えば、ある民族の土地が、他の民族に譲り渡されるといった施策で、結果としてコーカサスは、いわば民族問題の地雷原と化したのである。まずダゲスタンから南オセチアまで順を追って北コーカサスの民族問題を検討していこう。

ダゲスタン

ダゲスタンには30以上の民族集団が暮らしてきた。人口は180万で、アワール人が32%、ダルギン人15%、クムイク人12%、レスギン人11.6%、タバサラン人4%、ノガイ人8%、アゼルバイジャン人4%、ロシア人3.2%、残りを他の少数民族が分け合っている。幾つかのダゲスタンの村は、村人自体が幾つかの民族集団に分かれていることもある。

今日、ダゲスタンでは様々な民族集団が存在しているにもかかわらず、また摩擦はあるものの深刻な衝突というのは見られない。レスギン、クムイキ、ノガイ、ダルギンあるいはタバサラン人などは、自然の富の民族集団間での配分比率と自主的な処分権限に関して不満を持っている。また、これらのダゲスタンの民族集団は、アワール人に対抗するという点では、お互いに支持あっていて、政治的な自治を望んでいる。

それぞれのグループは、自らの民族の利害を第一義的に考えており、それを守るためなら、武器を手にして戦うことをためらわない。このため、全てのグループが完全武装で固めている。ダゲスタンにおいては武器を入手するのは難しくない。ダゲスタンの町ハサブユルトでは、カラシニコフ自動小銃は250米ドル、ピストルなら150米ドルで買える。武器は市場で公然と売られているのだ。いかなる二つの民族間の争いが、内戦に発展する懸念が存在する。

レスギン人はダゲスタン南部とアゼルバイジャン北部に居住し、公然と分離独立して自らの共和国を樹立する思惑を語っている。アゼルバイジャンの急進的なレスギン人は、独立闘争を行い、地域組織「サドワル」を結成している。この組織の構成員に

より、アゼルバイジャンにおける地下鉄爆弾事件、秩序攪乱・サボター ジュ事件などが挑発されてきた。カフカス情勢の分析を行ってきた専門家は、こうした事件の影にコーカサス情勢を不安定化させようとするロシアの影があることを指摘している。

アゼルバイジャンは、カラバフ問題を抱えるだけでなく、北ではレスギン人問題を、南にはタルイシ人の問題を抱えている。これらの問題は、アゼルバイジャンが領内にロシア軍の軍事基地を置くことを認めない内は、常に揺さぶりの種として使われるだろう。しかしながら、ダゲスタンではイスラーム教の力が繋ぎとめる役割をして、状況を危機的なものにならないようにしている。

チェチニア

1994-96年の第一次チェチェン戦争までは、チェチェン人とロシア人の間柄は良好で、73万5千人のチェチェン人と20万人のロシア人、10万人のイングーシ人、ユダヤ人その他様々な少数民族が暮らしていた。

戦争はチェチェンの民族分布を著しく変えてしまった。多くのロシア人はロシアへ去っていった。また数万のチェチェン人が住処を失い、祖国を捨てざるを得ない状況になって近隣諸共和国に移住していった。

その戦争の終結後には、共和国は経済危機にあえぎ、毎日の暮らしにもことかいた人々は、明日への希望を失っていった。政府は権力機構と国家運営を確立しようと努力をした。アスラン・マスハドフが大統領が選出された後、政敵であったシャミリ・バサエフとモフラディ・ウドゥゴフを自らの政権に招き入れ、健全な共和国内の政治的基礎を固めようとしたことは、重要であった。

しかし、全ての勢力が武装を固めている中で、治安組織が市民の安全を保障することは不可能だった。近隣の諸共和国からやってきた人々が身代金目当ての誘拐の対象とされたり、武装集団が近隣の共和国に繰り出して不法な石油取引に走り回り、様々な手段で私腹を肥やそうとした。このことが周辺民族のチェチェン人に対する印象を悪化させた。

チェチェン共和国の北部はスタプロポリ地方と境を接している。国境地帯にはコサックが居住している。チェチェン人とコサックの間柄は冷たいものだが、その間柄が戦争を誘発するようなものではない。しかしながら、国境地帯には緊張も観察されるので、武装衝突の可能性も除外しきれない。他方、ダゲスタン領内に居住するチェチェン人、チェチェンとの国境にあるハサブユルトの町のチェチェン人などは、チェチェンへの編入を望んでいる。このことは、ダゲスタンとの緊張関係を引き起こしている。また、オセチアとイングシェチアの関係にも注意している必要がある。というのも、もし武力衝突が両者間に起されれば、チェチェン人は必ずイングーシ人の側に立とうとするからである。

イングシェチア

イングーシ共和国には、16万人のイングーシ人と10万人弱のロシア人他の少数民族が居住している。ロシア・チェチェン戦争が始まったとき、イングーシ共和国は10万人の難民を受け容れた。チェチェン人と同一の言語を話すのであるが、イングーシ人は、自らを異なる民族と見なしている。イングーシ人は、ロシア・チェチェン戦争が始まる以前にチェチェン・イングーシ共和国から分離独立して、自らの共和国を形成した。分離したイングーシ人はチェチェン・イングーシ共和国のオセチア・イングーシ問題にとってきたやり方に不満を表明した。

古来よりイングーシ人はテレク川の右岸(東岸)に、オセット人は左岸(西岸)に暮らしてきた。1784年にロシア人はテレク川の岸辺にウラジカフカス要塞を築いた。この右岸はイングーシに、左岸はオセットに帰属していた。ところが、第2次世界大戦時、イングーシ人の強制移住が行われると、その市街部分が全てオセット人のものとなった。1957年のフルンチョフによる恩赦の結果、イングーシ人を含めて強制移住されていた諸民族は郷里に戻ったが、市街地とそれに隣接する東岸7つの村は、返還されなかった。この問題を最終的に解決されたとはイングーシ人は思っていない。

この問題を巡っては、ソ連時代にすらオセツト人とイングーシ人の中で武力衝突、殺人事件が発生していた。最近では 1992 年にこの問題が未解決であることから、多くの血が流された。今日境界線付近は比較的静穏であるが、いつ何時、ここが新しい戦争の発火点となるかも知れない。

北オセチア

北オセチアの人口は、63 万 2 千人で、52%がオセツト人、29%がロシア人、5%がイングーシ人、14%がその他の少数民族で構成されている。先に紹介したようにこの国は、イングーシとの未解決の問題を抱えている。大部分のオセツト人はロシア正教徒である。このことが、ロシア人とオセツト人の協力関係を強めてきた。コーカサス占領の歴史はオセチアから始まったのである。ロシアはオセチアで基礎を固め、コーカサスを東西に分離しておいてから、他のコーサス地域の占領に取りかかった。オセチアは以来、常に他のコーカサス諸民族と非友好的な態度をとり、コーカサスの統合への動きに積極的に参加しようとしなかった。

最近のロシア・チェチェン戦争においては、チェチェンを爆撃するロシア空軍機は、オセチアの首都から発進してきた。加えてチェチェン戦争を指揮するロシア軍司令部もそこにある。これらもチェチェン人にオセツト人に対する恨みを増長させている。これらの状況から、イングーシ・オセツト両民族間の関係が先鋭化すれば、必ずやチェチェン人はイングーシ人に味方して衝突に参加するだろう。加えて、グルジアと北オセチアの間にも緊張が見られる。これは、南オセチアの北オセチアとの統合という指向が原因している。

カバルディノ・バルカリア

カバルディノ・バルカリアは人口 75 万 3 千人で、その 48%がカバルダ人、9%がバルカル人、32%がロシア人、残り 11%を他の少数民族が占めている。トルコ系言語を話すバルカル人は第 2 次大戦時、他の民族と同様の強制移住をさせられ 1957 年に復権した。故郷に戻ってバルカル人は、社会団体を組織し、政治的権利の回復、土地の利用権など強制移住以前に持っていたものの回復に乗り出した。並行してバルカル人はカバルディン人とは分離して、自分たち自身の共和国の創立の希望を表明している。彼らの主張するところでは、カバルディノ・バルカリアの首都であるナリチクの半分と、南部国境に隣接する山岳地帯が、彼らに帰属すべき領域である。

バルカル人は自分たちの土地利用権を回復したいと願っている。ロシア国内で活動しているトルコ系の組織は、バルカル人に対して政治的な支持を与えている。しかしながら、この共和国の分割は、良い結果をもたらさないであろう。何故ならバルカル人が自らのものと主張するミンギタフ地方は、カバルダ人にとっても、自らの伝説発祥の地なのである。すなわちバルカル人とカバルダ人は、根源に関して同一の土地と強く結ばれているのである。

双方の急進的な集団は、武装を続けている。もしもカバルディノ・バルカリアで、武力に訴えようとする者が現れたら、ここは、新しい戦争の元になることだろう。一部分析家は、近隣共和国とのあれつきも指摘する。東部国境での土地問題を巡って、バルカル人とオセツト人の間に武力衝突があったことは、良く知られている。

カラチャエボ・チェルケシア

カラチャイ人とバルカル人は兄弟民族である。カラチャエボ・チェルケシアの人口は 13 万人、その 31%がカラチャイ人、42%がロシア人、10%がチェルケス人、7%がタバサラン人、3%がノガイ人、7%がウクライナ人を含む、その他の少数民族である。1926 年から 44 年まで、カラチャイ人は自治州を構成していたが 1944 年に強制移住処分を受けた。フルシチョフ時代の 1957 年に復権して郷土に戻った。しかし、自らの共和国を作ることは認められなかった。

カラチャイ人はチェルケス人と共に、カラチャエボ・チェルケス共和国を単一の政府の下につくることになった。反民族的なソ連の政策は、カラチャイ人と同じ地域に住むチェルケス人、アバジン人、ロシア人、ウクライナ人との関係を複雑化した。チェ

ルケンシアとの分離を望むカラチャイ人は、「ジャマガート(訳注:一般名詞としてはイスラーム武装集団を指す言葉)」を組織し、民族代表と「ジャマガート」の指導者たちは、1990年10月17日、民族大会を開催して、自らの独立を宣言した。しかし、モスクワは、そのような権利はないと承認しなかった。この独立宣言の後、カラチャイ人と他の民族との関係は、更に悪化した。アバジン人は、カラチャイ人の側からの圧迫に対する不満を公然と表明している。この国全域で、互いが悪意を感じあい、関係が陰悪化している。もしも、これらの民族集団の指導者たちが無思慮な一歩を踏み出したら、修復不可能な混乱が起こる可能性がある。

他方、カラチャイ人はカバルディノ・バルカリアの動向を注視している。というのは、バルカル人の将来に対し、彼らは無関心ではいられず、事態の展開の如何によっては、カラチャイ人自身が、積極的な役割を果たすつもりでいるからだ。またアブハジアは、カラチャエボ・チェルケンシアのアバジン人の状況に深い関心を寄せている。

アディゲア

43万2千人のうち、アディゲ人が22%、ロシア人が68%、ウクライナ人が3%、残りの7%がその他の少数民族という内訳である。アディゲアには、民族問題も民族間対立も存在しない。ただし、アディゲ人は自国のロシア人人口の急増に懸念を抱いている。今後も政治や文化面でロシア化が続くとアディゲ人は対抗しようとするに違いない。またアディゲ人は、黒海沿岸地域において、人口1万ほどの同一言語を話すシャブスグ人との統合を指向している。

アブハジア

ソ連時代、アブハジアは自治を認められていたがグルジアに帰属していた。ソ連が崩壊すると、グルジアは独立を宣言したが、アブハジアも自分たちの独立を宣言した。これに対して、その独立にグルジアは強く反対した。そして1992年8月14日、軍隊を派遣してアブハジアの占領を目指した。流血の戦争がおよそ1年半続いた。1993年9月30日、アブハジア人は、グルジア軍を自領域から撃退して事実上の独立を勝ちとった。

アブハジア情勢沈静化にグルジアは、ロシアの支援を要請した。ロシアはグルジアが自国領内にロシアの軍事基地を置くことを認めることと、CIS＝独立国家共同体に加盟することを支援の条件とした。グルジアは、この条件を呑んだ。1996年から今日まで、ロシアとグルジアの軍隊は、アブハジア国境を閉鎖した。その理由の一つには、アブハジア側からのチェチェン支援を防ぐと言うことが挙げられた。アブハジアには、日常用品すら輸送を禁止している。

アブハジアの大地は非常に豊かで、かつ豊穡であるため、ロシアとグルジアによる通商停止は効果を上げていない。グルジア側からのアブハジア再侵攻の可能性は存在している。アブハジア民衆は完全武装で備えている。治安機関は、社会秩序の維持が困難で、しばしば犯罪や略奪が発生している。現在アブハジアには、アブハズ人10万、グルジア人9万、アルメニア人8万、ロシア人6万、トルコ人1万、その他の少数民族5万人が居住している。

南オセチア

グルジアに帰属している南オセチア自治州は、人口およそ10万人。その66%がオセット人、2万8千人がグルジア人、さらに6千人のその他の少数民族が暮らしている。ロシアがモンゴル-タタール勢力に征服された時期に、オセット人は、コーカサス山地、現在のグルジアに移住してきた。後にソ連時代に南オセチア自治州を形成した。1989年に南オセチア民族戦線は、北オセチアとの統合希望を表明した。グルジアは、南オセチアの分離を認めなかった。そして局地的な軍事衝突が始まった。1989年9月、グルジア軍が南オセチアに進入した。5ヶ月間断続的な衝突が続いた。1990年、ズヴィヤト・ガムサフルジアは、南オセチアの自治権を無効とし、グルジアの直接統治を宣言した。1991年にはおよそ30名が死亡、その年の末には、衝突は更に頻度を増した。オセット人は、グルジア人の村落を襲撃した。

事態が沈静化したのは1992年になってである。今日に至るまで非常事態宣言は公布されたままである。軍事衝突が再開される可能性は常に存在する。

問題の解決は、何処に見いだせるか？

コーカサス問題の解決が困難なのは、一つに大部分のコーカサスの指導者たちが、以前の共産党員たちであることだ。これらマルクス主義者たちは、一夜にして民主主義者に姿を変えた。これらの新しい民主主義者は、自分の民族に尽くすべきところを、古い共産主義者としてモスクワの意を汲む政治を行っている。こうしてロシアは容易に彼らを操っている。

コーカサス問題の解決法：それはロシアの影響からの脱却である。

それには先ず、全ての指導部を変えねばならない。旧来の共産主義者を新しい人々に替え、コーカサス民族の指導者会議を組織し、その中で挑発者をあぶり出して追放しなくてはならない。

50以上にわたる民族集団を結びつける、アルタナティブなものとしてはイスラームしかない。たとえばダゲスタンではイスラームの基盤は強くないように思われているが、全ての民族集団に共通して受容されており、民族対立の激化を防いでいる。

もし、コーカサスの民族対立の根源が歴史の彼方に去ったと見なしたら大きな過ちを我々は犯すことになるだろう。全てのコーカサスの戦争において、宗教は第一義的な役割を果たしてきた。全てのコーカサスのムスリムは常に非ムスリム教徒(ギャウルイ))と戦ってきた。そして歴史上コーカサスのムスリム同士が敵対しあったという直接・間接の事実はない。コーカサス戦争の400年にわたって、イスラームは諸民族を占領者に向かって奮い立たせ、団結させてきた。もしもイスラームの真理がコーカサスに活かされるなら、今日の問題の人為的な実態が明らかになるだろう。そしてコーカサス諸民族の兄弟としての団結が強められるだろう。コーカサスにおけるイスラームの確立がコーカサスに平安と安定をもたらす最短の道であることは疑いない。